

淺野は植物の髓のやうな心を持つてゐる。

『君は僕が、四五日は死なゝいと思ふか』

『死なゝいよ』

淺野は言つた。

僕が死んでも氣づかひない様な顔をして野田は立つてゐる。

僕は少し宛落ちついて來た。

釋尊も此んな風にして、死の瀬戸際を體驗したのだらう。

十二月の半ば過ぎの戸外の空氣は、犬の皮膚にもこたえる寒さだ。

『夜露にあたると悪るいから、毛布を被て二階に上つて寝む方が好いよ。』

歩るけないかい』

僕は二人の肩に掴まつて、家の中へ這入つて、再び布団の中へ仰向けにねかされた。

水が飲みたい。

ガブ、土瓶の口から水を飲んだ。